

研究史

現在の子どもは自己固定感が低い傾向がある(文部科学省,2016)。自己肯定感の低下は生活の満足度等に関連している(文部科学省,2016)と言われており、子どもの成長に大きく関連している。子どもの自己肯定感を上げる方法として良い方法として考えられるのは、褒める行為である。褒める行為についての研究は多くの分野で行われてきた。褒める行為は、8つに分けられており様々な分野の心理学に関わっているとされている(仁平,2016)。褒める行為によって子どもをやる気にさせることができる研究は動機づけの研究から考えられており、言語的報酬のみの動機づけと外部報酬が与えられる動機づけは、言語的報酬のみで報酬を与えることで動機付けが上がる結果を示した(澤口,2014)。

目的

褒める行為のしにくさについては次のような研究がされてきた。山下ら(2014)は、学力が低いと評価された子どもの保護者は、子供の将来への不安や子育ての使命感を評価しやすいテストの点や成績等の数値的な情報から否定的な言葉を多くしてしまう傾向があると考察した。藤川(1991)は、教員が子どもと接するときに褒め言葉よりも、叱る言葉の方が長くなってしまいう傾向があるという結果を示した。これらの研究は褒める行為を阻害する環境や傾向についての考察されている。しかし、過去の褒める行為、褒められた経験についての研究は行われていなかった。褒める行為には抵抗感がある場合があると考えられ、本研究は、褒める行為の抵抗感に関する尺度の作成し、褒める行為を阻害する過去の経験とは何かについて考察をすることを目的とする。

仮説1 褒める行為の抵抗感は、過去の褒められた経験が少ないことで形成される。

仮説2 褒める行為の抵抗感は、過去に褒められた時の嫌悪体験によって形成される。

仮説3 褒める行為の抵抗感は、過去の褒める行為を失敗した経験によって形成される。

予備調査

目的：褒める行為に関する抵抗感を明確化する質問紙を作成し、因子分析を用いて分類分けすることを目的とした。

方法：私立文系大学生に回答を行い3年生から4年生までの52人分のデータが得られ、を因子分析にかけた。褒める行為に対する抵抗感に関する質問項目に対して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。

結果：固有値の変化から、5因子解を採用した。なお、この5因子への負荷が低い、17の項目の関連が確認できなかったため削除し再構成をした。第1因子は、褒める行為を好意的に捉えている因子がまとまっていたため「褒賞ポジティブ効果因子」となづけた。第2因子は、褒める行為を否定的に捉えている因子がまとまっていたため「褒賞ネガティブ効果因子」となづけた。第3因子は、褒める行為を素直にすることができない内容の因子がまとまっていたため「褒賞遠慮因子」となづけた。第4因子は、褒める行為をしてしまうとデメリットが起きると考えられる因子がまとまっていたため「褒賞侮辱懸念因子」となづけた。第5因子は、褒める行為に価値を感じない項目がまとまっていたため「褒賞無価値因子」となづけた。5つの項目に関して項目ごとの合計得点を算出した。褒賞遠慮因子と褒賞無価値因子に関して概ね正規分布が見られた。

考察：それぞれの項目は過去に研究されている内容と関係している部分が見られ褒める行為の抵抗感と関連する傾向はあると考察できる。褒める行為に関してマイナスのイメージを持つと考えられる「褒賞ネガティブ因子」「褒賞遠慮因子」「褒賞侮辱懸念因子」「褒賞無価値因子」に関して、褒める行為を行うことで自分にとって不利益が起こると考えられることが原因となって因子がまとまったと考察ができた。

本調査

目的：本調査では、褒める行為に対する抵抗感が構成させられる要因が過去の経験にあると考え、過去にどのような経験をしてきたのかと褒める行為に関する抵抗感の関連に関して研究を行うことを目的とした。

方法：褒める行為に対する抵抗感に関して過去の経験との関係分析するための質問紙を作成し、私立文系大学生151人に回答を得た。うち51枚は欠損値があったため、100枚を分析にかけた。分析方法はSASを用いて重回帰分析で褒める行為の抵抗感を分析した。

結果：以下3つの結果が求められた。

結果1：他者からの褒賞経験の少ないものは、褒める行為に価値を感じていない。

結果2：過去に他者からの褒賞経験で不快な体験をしたものは褒める行為に懸念を抱いている。

結果3：過去に褒める行為で失敗を経験したものは褒める行為に価値を感じた。

表1 被褒賞経験の重回帰分析結果

要因	自由度 d. f.	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t 値	p
被褒賞経験	1	-0.30	-0.25	-2.79	*
R^2			0.267		
		*p<.05	**p<.01	***<.001	

表2 褒賞懸念因子の重回帰分析の結果

要因	自由度 d. f.	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t 値	p
被褒賞嫌悪経験	1	0.28	0.20	2.01	*
R^2			0.074		
		*p<.05	**p<.01	***p<.001	

表3 褒賞無価値因子の重回帰分析結果

要因	自由度 d.f.	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t 値	p
褒賞失敗経験	1	0.43	0.20	2.23	*
R^2			0.267		
		*p<.05	**p<.01	***<.001	

考察：褒める行為が行えるようになるためには、人生の中で褒められる経験すること、褒める観察をすることが重要になってくるだろう。褒められる体験が多かった人は、褒める行為について褒める行為をどのように行うのか、褒めるタイミングはいつなのか、褒める行為に関しての学習がされる。さらに幼いころに褒められれば、社交辞令などの言葉の裏を考えないことが多いため、純粋に褒められたことに対してうれしいと感じ、褒める行為はうれしいことであると学習されていくだろう。うれしいことであると学習されることで、褒める行為は強化され抵抗感が形成されにくくなるだろう。その後、褒める行為を行っていく中で、褒める行為のやり方について成功と失敗をするだろう。成功した場合には、相手が好意的な反応をしてくれることや、関係がよくなることでさらに強化されていくため褒める行為は増えていくだろう。失敗した場合、友達との関係が悪化することが考えられ、悪意を持って褒めたわけではないのに、否定的に反応されてしまう矛盾から褒める行為に恐怖のような感情を抱く可能性がある。これらの要因から行動は弱化されていくだろう。さらに、相手を褒める行為で成功していたとしても、相手から褒められる行為で不快な経験をすることがあるだろう。褒められて不快な経験をすれば、褒められて嬉しいという感情がなくなることが考えられ、褒められる時には、けなされるなどの学習がされるだろう。不快な経験で、褒める行為は弱化していくだろう。

幼い頃に褒められる経験をあまりせず、褒める行為の学習を行っていない人もいるだろう。褒める行為の学習を行っていない人は、褒める行為を行うタイミングや方法がわからなく褒める行為ができないことがあるだろう。ほかにも、褒められてこなかったことで褒められることが他者とのコミュニケーションのために効果的な方法であるや子育てを行っていく中で子どもの自己肯定感を上げるための重要な方法であることを実感できないため、褒める行為を行わない可能性がある。子どもの頃に褒められ成長してから失敗経験、嫌悪経験をしていなくても条件付きの褒められ方をしている人は褒めることに関してよくない印象を持つだろう。例えば、テストなど頑張ったことに対して「頑張ったね。でもあと少しで100点だったのにね」と言われる。「おわったね。もう少し短い時間でできたらよかったのにね」と言われるということは、褒められることとけなされることが同時に起きるためいい印象を与えないだろう。このため、褒める行為はいいことではなく人をけなすことや、人のことを良く思っていないときにいうことであるなどのよくないということが学習され、褒める行為が弱化されていくだろう。今後展望としては、尺度の α 係数が低かったため質問紙の見直しが必要である。

文献

藤川美恵子 西山啓 1991 社会 600 生徒指導に関する心理学的研究(1)：教師による叱責・賞賛の言葉の分析を中心として 日本教育心理学会総会発表論文集 p. 527-528

文部科学省 日本の子どもたちの自己肯定感が低い現状について